



営農NEWS



水田除草剤の剤型－その特性と注意点について

水田で利用する除草剤には、近年、多種多様の剤型が登場しています。従来から、散粒器の利用や手散布などで散布した粒剤（1キロ剤や3キロ剤）、特定容器内の原液を一定間隔で振って散布するフロアブル剤などが多く利用されてきました。近頃は更に、畦畔から面積当たり一定の個数を投げ込むジャンボ剤や田内にひしゃく等で一定量を投げ込む豆つぶ剤、また、フロアブル剤や顆粒剤を入水時の水口に一気に投入して拡散させる水口施用、粒剤やフロアブル剤を田植と共に専用散布機で散布する田植同時散布など、種々の使用法が導入されています。

これらの剤型や処理法は、それぞれに利便性や省力性を備えています。一方、注意すべき点も持ち合わせていますので、その特徴と使用上の注意点について紹介します。

<除草剤の効果を高めるポイント>

- 1 田植え後の活着が良好になるよう、健全な苗を育てましょう。
- 2 代かき作業は丁寧に行って、凹凸のない均平な田面にすることが最も重要です。また、薬剤処理時は水口や水尻を止め、漏水を防いで湛水を保ちます。
- 3 前年に発生していた雑草の種類や発生時期を検討し、それらに適応した除草剤を選んで処理します。
- 4 処理する除草剤の使用法、注意事項等をラベルでよく確認し、効果を発揮する時期や量などを十分に守って、薬剤を均一に処理します。
- 5 薬剤処理後7日間は落水しない、止水管理（田面が露出の場合は、補充分を静かに継ぎ水かんがい）とします。
- 6 処理後直ぐに水田へ侵入すると土壌表面の薬剤処理層を壊して効果が低下するため、補植等の作業は処理前ですませておきます。

	特 性	注 意 点
1	1キロ粒剤	
	1 水田内全面に均一に散布機器を使用して散布するが、従来の3キロ剤に比べ、1/3の量や手間で省力的です。 2 田植機に専用装置を装着し、田植えと同時に散布する（使用時期が移植時の登録薬剤のみ）。	1 散粒機器の量調整を適正にして、撒き過ぎや不足に注意する。 2 田植同時処理では、植付深度を適正にする。浅植えや浮苗、土の戻りが極端に悪い水田では薬害の恐れがある。また、移植後は速やかに入水し、補植は原則行わない。
2	ジャンボ剤	
	1 特殊な粒剤や顆粒を25～50g単位で水溶性フィルムに包装し、10a当たり8～20個を直接に水田畦畔から投げ込む製剤で、水中（水面）拡散機能が高いためムラなく均一な処理が可能です。	1 散布時の水深は、少し深めの5cm程度が目安です。 2 田面が均平でない水田では、拡散が妨げられるので、事前に改善する。 3 藻類や表層はく離の発生が多い水田では、早めの散布に心掛け、多発生している場合は散布しない。
3	豆つぶ剤	
	1 軽量化された発泡性の大型錠剤を、10a当たり250g、そのまま水田畦畔から手まきやひしゃく等で投げ込む製剤で、水中（水面）拡散機能が高いためムラなく均一な処理が可能です。	1 散布時の水深は、少し深めの5cm程度が目安です。 2 田面が均平でない水田では、拡散が妨げられるので、事前に改善する。 3 藻類や表層はく離の発生が多い水田では、早めの散布に心掛け、多発生している場合は散布しない。
4	フロアブル剤・顆粒剤	
	1 フロアブル剤の原液を、水田畦畔などから歩行しながら本田内に直接手振り散布する。 2 フロアブル剤原液を、田植機に専用装置を装着し、田植えと同時に散布する（使用時期が移植時の登録薬剤のみ）。 3 圃場に散布するフロアブル剤、顆粒剤の全量を、入水時の水口に一気に投入して水田全面に拡散させる。（水口施用）	1 手振り散布の場合は、ジャンボ剤や豆つぶ剤と同様の注意が必要です。 2 田植同時処理の場合は、1キロ粒剤と同様の注意が必要です。 3 水口施用は、1～2cmの水深で水尻を止め、水口から勢いよく入水しながら所定量の薬剤をいっきに投入し、水深が5cm程度になったら止水して湛水状態を保つ。水尻からのオーバーフローに注意する。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040